

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

B. 円滑な学位授与の促進

⑤ポートフォリオ等を活用した到達度の把握と研究指導の充実

⑤ポートフォリオ等を活用した到達度の把握と研究指導の充実

《理工農系》

●広島大学生物圏科学研究科

「食料・環境系高度専門実践技術者養成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

- ・ eラーニングポートフォリオ (Web 教育記録システム) の開発に時間を要し、またこのシステムの教員・学生への浸透に苦労した。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

- ・ この Web 教育記録システムは、研究科独自のシステムであり、各コンテンツをより使いやすいものへと変更を重ね、最終的にはシステムの開発に 2 年間を要した。そのため実際には 22 年度からの運用となった。また、学生と教員への説明会 (FD) を通じてこのシステムの浸透を行ったが、全ての学生や教員への浸透に困難を要した。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

(結果が望ましい場合)

- ・ 開発したシステムに関するマニュアル冊子 (学生用および教員用) を作成し、説明会と FD を通じて何とか 22 年度より運用できるようになった。

《医療系》

●広島大学医歯薬学総合研究科創生医科学専攻

「バイオデンティスト育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

大学院全体で習得したものについてのポートフォリオという概念自体の理解を得ることが難しく、「コースワーク」についてポートフォリオを課すこととなった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

大学院生個々の研究テーマを指導するグループをかならずしも把握できていなかったため、当該大学院生の評価のために教職員で共有するポートフォリオのデータの範囲を決めることができなかった。指導グループ外の大学院生についてコースワークで実施した実験手技の理解や修得度の把握が履修期間後は追跡できず、大学院修了時にコースワークが最終的にどのような成果をもたらしたのかという点について、教員側へのフィードバックが十分できない状況にあった。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

B. 円滑な学位授与の促進

⑤ポートフォリオ等を活用した到達度の把握と研究指導の充実

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

ポートフォリオで評価する対象・科目が複数にまたがる場合は、事前に担当教員および研究テーマ指導教官、学生との間で個々にポートフォリオのガイドラインを設定する必要がある。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例《非公表プログラムの事例》

B. 円滑な学位授与の促進

⑤ポートフォリオ等を活用した到達度の把握と研究指導の充実

《非公表プログラムの事例》

B. 円滑な学位授与の促進

⑤ポートフォリオ等を活用した到達度の把握と研究指導の充実

●事例6

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

履修指導に関しては、プログラム代表及び教育企画委員との連携のもと、各学生の指導担当教員が個々の学生の資質に照らして、各学期ごとに集計報告される履修状況を把握するとともに、全学生が行う年に各1回行われる修士論文中間発表会並びに修士論文発表会の場で到達度の総合的な状況を把握してきたが、研究テーマが多く分野にわたることから、分野ごとの進捗状況の評価の比較が容易ではない面があった。

(苦労したこと、困難であったこと、具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

各研究プロジェクトの進捗状況が多様で個別の背景を持っている場合が多く、一元的な比較評価が難しい面があることから、学生の履修状況を把握するための情報共有の方法に関する検討は行ってきたものの、ポートフォリオの作成までには至っていなかった。修士論文中間発表会及び本プログラムの中間及び最終の発表会においては、十分な時間をかけたポスターセッションの場を通じて、全学生に対して全教員からの進捗度の評価を含むコメントがフィードバックされる仕組みを以前より構築しており、前述の点によりプログラムの実施内容に影響が出ることはなかったと考えている。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

プログラムの成果に関する評価は、各学生による自己評価、指導担当教員による学生の評価、学外連携組織の担当者による各プロジェクトの評価および学生のインターンシップの状況に関する評価、発表会での全教員による各発表に対する評価など、複数の評価を行い、教育目標に即した成果の状況を把握した。事後評価で指摘された通りESDの観点からの評価基準や評価手法を取り入れることにより、改善することができると考えている。